

第一回集会后の感想

島田 隆

仙台での第一回「村研」集会をかえりみて、いろ／＼意見はあるでしょうが、研究共同への第一歩として成功だったと思います。諸報告及び討論の中には、研究宿題に直披または全的に副わないものもあって（私達の煙山村報告もその一例でしょうが）、一見、テーマが多様にも見えました。そのためか、却て各自の村落概念がいかに多様であるかがはっきりしました。村落概念の統一は村落研究の最小限の前提だと思えますが、そもそも村落が歴史的な存在であることを考えて、村落を歴史的・具体的に説明するのではありません。完全な村落概念を作ることもできません。従って、村落の実態調査にも

とずいて、いわゆる理論的分析をほどこす場合にも、他面にたえず村落の歴史的考察を盛り込んでいきたいと思えます。この立場からの研究には、どうしても村落を全構造的に掘り下げていく必要があり、おのずから地域別にも専門別にも多数の分業にもとずく協業を必要とします。この作業を経るうちに、村落概念もしだいに統一してくるし、したがって研究も一段と進展すると思えます。「村研」はその作業場として最もふさわしいものになるべきです。これはもちろん理想だとしても、幸い同じ村落研究につながるものとして、右のような意味での研究方法と成果の交流を何とかして円滑にしたいと思えます。私達は東北在住の者として、東北村落の代表的ないくつかを徹底的に研究しようとしています。日本村落の究明のためには、各地での同様な調査研究に期待する所甚大なものがあります。

来年度大会の宿題についても、いま申したようなわけで、たとえば農地改

革による村落構造の変化のうら、何か一つに問題を限定するとしても、歴史的にそれにつらなる問題をも含めて、ある程度のひろがりを持つるようになりたいと思えます。
(東北大学)